



深夜 仕事の帰り道 ふとみあげると真っ黒な空に 星ひとつ輝いていなかった。
ぽっかりと浮かぶのは月だけ。

僕は なにも感じなかった。でも空を見上げてこう言った。
「空に...星が減ったよな。ここが東京だからかな...」

「え？星？」横を歩いていた新入社員の遠藤が言った。
「星ならありますよ たくさん。」

おどろく僕に 遠藤は少し微笑みながら言った。
「あ 先輩には見えていないんですね。 これ掛けてみてください。」
そういうと遠藤は 自分の掛けていたメガネを僕に差し出した。



黒縁の若者向けのメガネ。遠藤のトレードマーク。

僕は あまりそれが好きではなかったけれど 遠藤の珍しく自信たっぷりのセリフに思わずメガネを受け取った。



ああ！本当だ 星だ 星がいっぱい輝いている

僕はしばらく言葉を失った。遠藤は隣でクスッと笑った。

「先輩。 人は頑張っているうちに 何のために頑張っているのかわからなくなってしまう人がいるそうです。

頑張っているうちに 周りが見えなくなってしまう人もいる。

東京の星が減ったのではなく、星が見えなくなっていたんですね。」

